

西本願寺の教状視察とイタリア訪問の足跡

——島地黙雷の『航西日策』を中心に——

シルヴィオ・ヴィータ

1. はじめに

近年、歴史学の動向を見ると、時代の流れに従ってさまざまなもののイメージ形成にスポットを当てる試みが目立つ。イメージというものは人間の社会活動の大きな原動力であり、あらゆる現象を認識するに当たって見逃せない前提ともなっている。近代に於いても、国と国の文化交渉の中で既成のイメージが占めるウェイトが大きい。そういう事実を踏まえて見ると、特に「文化史」(Cultural History)の領域では、「世界」の歴史よりも、「世界の認識」の歴史のほうが、中心課題となっているかのようだ。実に、世界の認識を作り上げるプロセスは、近代社会では国民共通のイメージ形成にもつながる。

そういう立場から近代日本における「イタリア」のイメージの変遷を明らかにするため、まずその過程を解明する必要がある。新聞、小説など様々なメディアの影響はいうまでもないが、旅行記が教えてくれることも多い。特にその時代、渡欧の経験が知識人にとって大きな共通財産であったので、ヨーロッパの地を踏み、その事情を伝える文献がイメージ形成の大きな一コマともなる。イタリアというものが、時間が経つにつれ日本の知識人たちの中で様々な形で浸透しはじめ、異国でありながら、ある意味では近代日本の知の一要素となったと言っても過言ではない。

また社会学で使われることばを借りれば、イタリア像は、いわゆる「公共圏」に根を下ろし、社会全体の「想像体」(imaginaire)にもひとつの特徴を与えている。このことを踏まえて本論で取り上げる資料は、島地黙雷(1838 - 1911)という真宗本願寺派(西本願寺)の僧侶が書いた旅行記である。本来ならば、これとほぼ同じ時期にイタリアを旅した岩倉使節団、また同じく真宗大谷派(東本願寺)の視察団や木戸孝允の報告書、日記などと読み合わせたいところではあるが、ここではその歴史的背景と資料そのものの分析にとどまる。黙雷以外のものについては先行研究があり、深入りする必要はないだろう。彼の旅行記がイタリア像の形成にどれほどの役割を担ったかは別として、イタリアイメージの変遷の歴史を明らかにするには、この旅行記を通して当時の知識人に、ヨーロッパの中の「イタリア」というものが、どのように映っていたかを見逃すことはできない。

2. 島地黙雷のイタリア旅行の背景—その一：明治期の国際関係と宗教問題

島地黙雷のヨーロッパ視察の背後には、明治初期の宗教問題と当時の日本仏教界の特殊な事情があり、新時代に應えて敏感な動きを示した真宗教団と明治政府の要人との人脈も関係して

いる。ヨーロッパ視察以後、黙雷自身は日本仏教界において指導的な役割を果たし、著述活動などで近代仏教を形成する一人となるが、当時30代にして真宗本願寺派の法主に教団の改革を薦めるなど、かなりの信頼を受けていた。長州藩の出身であることも、この時期の彼の活動の一つの鍵だと言えるだろう。

よく指摘されるように、浄土真宗両派は過去二百年以上続いた幕府との関係もあり、幕末維新の時期、新政府に対する両者の立場はまったく異なったものであった。西本願寺（本願寺派）は伝統的に反幕府のスタンスを貫いたが、長州藩との人脈を活かし、木戸孝允など長州系の官僚と密接な関係を持っていた。一方、大谷派（東本願寺）の人々は歴史的にも徳川家に近い立場を最後まで維持し、新しい時代に入ると、一時は敗者側に立ったにも関わらず、明治政府に接近する道も開いていた。ともかく維新後、神仏分離政策の波がやや落ち着く時期になると、一向宗門徒を率いる両方の教団は、岩倉使節団のプランを立てた政府の動きに習うかのように、時を同じくして最高指導者を含めた「教状」視察の海外旅行を計画することになる。

一方、明治政府の外交においても、国際社会での日本の位置づけができるまでの道、いわゆる「近代化」への路線を宗教の問題抜きにして語ることはできない。それは、キリスト教解禁から信仰の自由論まで、様々な形で近代日本の政治、思想、外交の主流のひとつにもなっている。岩倉使節団の派遣も安政条約の改正を目指す上で、宗教とはどのようなものかが避けられない課題であった。その後何十年も続く条約改正までの歴史を見ると、近代的な信仰の自由への思想が陰に潜んでいる。欧米での政教の関係、人間の宗教行為、宗教制度の歴史を知ることは、このことを考察する材料になるだろう。

また、そのような考察の必要が政府だけにあったわけではない。教団側にも新時代の社会でどのような立場をとるか模索する意味で、ヨーロッパの近代社会と宗教の関係を正しく把握する必要があった。事実、動機はどうかであれ、維新当時の内政は、初期の段階から日本の宗教界の再編成にもつながっていた。神仏分離令から始まった一連の政策は、失敗を繰り返しながらも、既成集団の位置づけを問題にしている。「宗教」そのものは当時の新語でもあり、宗教という概念自体が明治人の共通の意識の一部となったのも、本論で取り上げる人物の経験からも生まれた結果であるかもしれない。つまり、「宗教」というものが普遍的な現象や世界各国共通の社会制度であるとすれば、まずどう定義すべきもので、次に、日本の社会や歴史的事実にどのような形で当てはまるかということが問題である。したがって、日本の宗教界、特に真宗教団が当時の「先進国」を参考にして存在意義を保ち続けるならば、どのような形で改革を行うかが視察の中心課題となる。西本願寺当局が政府に出した「渡航願書」のこぼれを見ると、

教法の儀は民心維持の基本に付、国家一日も忽せにすべからざるの要務に御座候処、近来家風衰頹に及び、御政化裨補の実効顕われがたく、方今百發並行の御盛運に候得ば、何とぞ旧弊芟除、法綱更張仕度と竊に苦心まかり在候えども、微力難堪其任慚愧の至奉存候。別て海外の教法追々辺境に伝播仕候哉にも相聞、民心多岐、遂に紛擾を醸し可憂候。就きては知彼知己の格言も有之候間、各国布教の事情も及見聞度。

とある。言い換えれば、二つの視察団は以上の問題について考える材料を探しに、「彼を知り、

己を知る」という使命をもって、岩倉具視が率いる使節団に歩調を合わせ、1872年から1873年にかけて（明治5-6年）ヨーロッパを旅した。

3. 島地黙雷のイタリア旅行の背景—その二：渡欧の経緯

最初は西本願寺の一行が木戸孝允に働きかけ、岩倉使節団と同行することを考えていた。少なくとも横浜から同時に乗船し、ヨーロッパまでの旅路を共にする予定だったようである。だが準備が思うように整わず、その上、1871年10月には引率役を勤めるはずだった大谷光尊（明如、1850-1903）が、父広如（1798-1871）の死去により、同年22才の若さで法主の座に付くことになった。これにより明如が欧米視察を断念することとなり、代わりに大阪広教寺の梅上沢融（1835-1907）がメンバーに加わった。彼が法主代理の団長と見なされてよいであろう。しかし、海外教状視察を目的としていたのは梅上と黙雷たった2名で、共に旅した他の3名は同じ本願寺派遣でありながら視察ではなく、留学のためヨーロッパに送られていた。したがって到着後は、赤松連城（1841-1919）と堀川教阿（生没年不詳）は英国に、光田為然（1848-1875）はドイツにそれぞれ留まる。5人のグループは同じ世代で、30代前半の人ばかりであった。すでに触れたが、長州系の人が多数を占めていた。『航西日策』に記されているように、黙雷、赤松、三田は長州出身という共通の背景を有している。

一行は岩倉使節団の出発から約3ヶ月遅れの3月初めに横浜を後にし、香港経由でヨーロッパに向かう。当時、岩倉使節団の後には日本のさまざまな官庁からの視察団が相次いで送られ、西本願寺のグループも左院の視察団と同じ船に乗った。これらの人たちの名前は黙雷の旅日記に記録され、ヨーロッパまでの長い旅の間、いろいろな新しい経験を共有したとことは容易に想像できる。教状視察団は4月20日、まずマルセイユの港からヨーロッパの地を踏んだ。そこからは黙雷の『航西日策』を手がかりにすれば、グループとしてよりも彼一人の行動にしばらくをえなない。事実、一行の行動を詳しく分析しても、本当の視察行為に携わるのは黙雷一人であったからだ。彼は行く先々でさまざまな人物と交流し、旅の友を変えながら1年足らず（約11ヶ月）でヨーロッパを回って行く。順にいうと、フランス、イギリス、ドイツ、再度フランス、そしてスイスを經由して1873年の春にイタリアへ渡った。その時期には珍しいことに、イタリアを東への橋渡しとして使っている。岩倉使節団も、東本願寺の人たちも、まずナポリまで行ってから北へ戻りイタリアを後にしていた。一方、黙雷はナポリからギリシャへ船旅をし、そこから西アジア、キリスト教の聖地のパレスティナを訪れて、帰路、憧れだった仏教ゆかりの聖地インドを訪問して帰国する。これは明治仏教界にとって開国以来の一つの定番となった。こうして1873年の7月15日、日本に帰国し、およそ1年4ヶ月の長旅は終わった。

西本願寺の一行は岩倉使節団のおよそ3ヶ月後に西へ向かったが、まったく同様の目的で旅立った東本願寺のグループは、それより6ヶ月以上遅れた10月15日に横浜を出る。東本願寺当局者は明らかに黙雷たちの計画に刺激され、似たような構成の団体を送ったが、黙雷自身の助言もあったようである。近代日本の歴史において大きな意味を持つのは、この三つの団体が1872年の年末から翌年2月にかけて共にパリで過ごしたことだ。パリは19世紀ヨーロッパの「首都」とまで言われ、視察のベースとして使うには最適の地である。そこにはすでに視察団以外

の多くの人たちが、勉強を目的として居住していたので、さまざま情報と刺激も得られた。また年が明けた1873年には、ルートは違えどイタリアへ向かったこともこの三つのグループの共通点であり、彼らはその年の春からイタリアを旅し、イタリアについて豊富な記録を残す。1873年（明治6年）は、まさに日本におけるイタリアのイメージ形成の原点の年といえるかもしれない。

4. 島地黙雷の旅行記『航西日策』の性質

島地黙雷の旅行記に見るイタリアに触れる前に、『航西日策』そのものが渡欧の記録としてどのような性質を持つか、そしてその重要性について簡単に述べたい。とくに同時期にヨーロッパ、中でもイタリアを回った他のグループの記録と比較して、どのような資料価値があるかを考える。いうまでもなく、この旅にまつわる記録を読むことで、イメージ形成における当時の様子を窺うことができる。そういう意味では、岩倉使節団の『欧米回覧実記』、東本願寺一行の唯一の記録となる成島柳北著『航西日乗』や、この黙雷の『航西日策』などは共通の基盤に立つ資料である。同じくイタリア像形成の初期段階を伝えるドキュメントとして吟味すべきであろう。

とはいえ、この三つの記録は明らかに異なった性質を持ち、一般社会への影響も違う。『欧米回覧実記』は使節団の正式の報告書である上、いろいろな編集作業を踏まえ、国家事業の成果を伝えるものであり、いわば西洋文明の諸相を国家の権威を借りて紹介したものである。これに対して、成島柳北の『航西日乗』は文学性でアピールする作品であり、早々と文藝雑誌にも載せられている。公開されているものであれば、その裏には、ある程度の編集作業もあったのではないかと推測できる。事実、文学者の産物にしては地名などの外国語表記の正確さや現地情報の詳しさでは驚くべきところがある。だが、『航西日乗』は作者が個人的なきっかけで旅に出たのではないにしても、あくまで私的な記録である。そういう意味では、黙雷の旅行記とペアで考えても差し支えない。ただ、黙雷の文章は未公開のまま長い間眠り、近年黙雷全集が出て初めて世に出た。これはまず根本的な違いである。同時代のドキュメントには変わらないが、当時の日本人の目に映ったヨーロッパの諸相を伝えるにしても、一般社会に影響を与えたものではない。

『航西日策』は、タイトルの構成まで成島柳北の『航西日乗』を連想させる。黙雷はそれを意識して名付けたのか、それとも、逆に成島が黙雷のものを知っていたのかはわからないが、「日乗」という言い方のほうが、やや一般的であるかのように見える。永井荷風の『断腸亭日乗』をすぐに連想させる。鴟外や吉田松陰など「日乗」をタイトルに含む日記は知られており、一方の『航西日策』にはいささか独創的な響きがある。いずれにしても、『航西日策』は文字通りの「日記」であって、横浜出航の時から一日も欠かすことなく、帰りの旅の途上、インドに立ち寄るまで毎日の出来事などを綿密に記している。筆者は、同行者などの情報や旅程のほか、訪れた場所の中で特に印象に残ったものがあれば、素朴な形にしても感想を書いている。もうひとつ付け加えると、島地黙雷全集には、この旅の記録として他に『洋外漫筆』という、短いテキストが収められている。ただし、これはほとんどが船旅のことを記したもので、旅の一部分しか扱っていない。香港を後にしてからフランスのマルセイユに到着するまでのことだけに触れており、

イタリアはまったく視野に入っていない。『航西日策』と同様、全集に入るまでおそらくノートの状態のまま保存されていたのであろう。

5. イタリアの旅

西洋の宗教事情と日本の政教問題を念頭におきながら旅をした島地黙雷は、キリスト教文化にできるだけ接触することを願っていたはずで、イタリアは初めから必須の訪問先であっただろう。というわけで、1872年12月にはドイツから直接ローマへ向かおうとしている。『航西日策』にはイタリアではなく、ローマと書いた。キリスト教の聖地としてのローマは、彼がイタリアへ行く主な動機であったが、後に訪れるエルサレムもまた同じ意味で旅程に入ったに違いない。だが実際は、12月ベルリンからの出発間際になって、6日ぐらい前に東本願寺のグループがパリに着いたという知らせが入り、ひとまずローマ行きを見送ってパリに赴いた。そして前述のとおり2月の末まで留まる。結局、黙雷がイタリアに入るのは2月28日で、フランスからスイスのジュネーブを経由するという当時のオーソドックスなルートをとった。成島柳北はやや遅れて同じモンチェニシオのトンネルからイタリア側に抜けるのだが、彼も黙雷と同様、そこで近代文明の大きな事業に対する驚きを隠せなかっただろう。一方で、3月17日には岩倉使節団が北から下り、5月8日ヴェローナからイタリアに入った。3つのグループの中では、黙雷が一番早くイタリアを旅したことになる。

黙雷はまずトリノから東へいろいろな町を通っていくのだが、ゆっくりと訪れたところはミラノ、ヴェネツィア、フィレンツェ、ピサ、ローマとナポリの六都市である。3月24日ナポリからギリシャ、トルコ方面へ旅立ったので、イタリア滞在は約3週間だった。ちなみに、成島柳北の滞在は一番短く、4月6日にフランスへ帰ったのでちょうど3週間、岩倉使節団は6月3日にオーストリアの国境を越えており、黙雷よりもほんのわずかに長い。パリでアメリカに渡る梅上と別れてから、黙雷は視察団に同行せず独立した行動をとった。ここで、後に新聞記者としても有名になる福地桜痴（源一郎、1841 - 1906）が岩倉使節団の一員としてオスマン・トルコ帝国視察の特命を受け中近東に向かうことになり、黙雷も同行している。桜痴はイタリアでの同行者であり、ほぼ同年代であった。

イタリアの教状についての情報は、黙雷が正式の報告書の中に整理した形で後から盛り込まれている。この関係の資料は彼の全集に収載され、視察の成果を伝えており、『欧米各国宗教略列』や『欧州政教見聞』などがそれである。それに比べ『航西日策』におけるイタリアの部分では、同じく、その時代の言葉で「寺院」、「大本山」の話が多く含まれてはいるが、教状を観察する意識は薄く、その場の景色や建造物についての描写がほとんどである。事実、桜痴の存在さえほとんど無視され、旅行中、黙雷の目に映ったものがそこに書かれているのだが、主に1873年のイタリアについて語っている。

6. 島地黙雷の目に映ったもの

『航西日策』の記述を追っていくと黙雷のイタリア旅行の特徴を掘り起こすことができる。彼の基本的な態度は、観光客のそれであるように見える。イタリアにおける日本人観光の原始時代とでも言うべきこの時期には、国が統一して整備しつつあった鉄道網の恩恵が大きい。もちろん黙雷も鉄道で移動しているが、都市部に入るとヴェネツィア以外では馬車を利用している。カメラであちらこちらの写真を撮ることができなかった時代でも自分が見た風景を記憶に止めたいという本能は今と変わらない。自分でシャッターを下ろせないとしても、どこへ行っても「駅で写真を買う」という彼の行為が、旅行記に見られる。それが絵はがきに当たるものなのか、本当の風景写真を旅人に売る習慣があったのかはわからないが、『航西日策』の記述による限り、黙雷はかなりの数の写真を集めたようである。

もう一つの特徴は、彼が一人旅であったかのように見えることである。『航西日策』をひもとくと、イタリア以外の地域では出会いに満ちている。現地にいる日本人と談話したり、同じ宿に泊まったり、議論したりしている。しかし、イタリアに入るとこのような活発な人間交流はびたりととまる。同行する福地桜痴さえ黙雷の旅日記のイタリアの部分にはほとんど登場しない。辛うじて最後のナポリ滞在中に桜痴が珊瑚を買ったことに言及するだけである。イタリア北部では、ミラノやヴェネツィアに向かう途中、他の日本人に出会うが、同国人と交流する意欲は失っていたようである。彼は、わずかないられちを含みながら「此の間日本人家を観る頗る多し」とまでこぼす。その様子は、イタリア観光を満喫することに専念しているとしか映らない。

黙雷のイタリア発見の旅の描写は同じ口調で通すことはない。平凡な観光名所のリストだけの日もあれば、特別に惹かれた事柄をやや興奮めいた態度で一日のスペースを拡張して書いている日もある。人付き合いから解放されて余裕があったのか、イタリア滞在期間中はこのような傾向が目立つ。ヴェネツィア、ローマ、フィレンツェを初めて訪れた時の感動は想像にかたくないと認めながらも、そこでの『航西日策』はリスト調に近い。これでは、単なる名所カタログとなり、後から見たものを思い出す役割を果たすに過ぎないであろう。ヴェネツィアでは、その時期の日本人訪問の定番にもなっていた天正少年使節や支倉常長関係の文書を見せられる。フィレンツェではアルノ川の橋の描写から、宗教改革の関係で黙雷の注目を惹くサヴォナローラの像が登場する。ローマでは19世紀の考古学の発見の成果に感動し、さまざまな「寺院」の装飾に美術的かつ歴史的な意味もあって好奇心をそそられている。ローマは、とりわけハードスケジュールの観光に尽きる感さえある。一息して何かにスペースを割くようなことはないを見る。

そのようなことを探そうと思えばまずミラノに関する記述に戻る必要がある。黙雷はここに3日間留まっている。ミラノは、当時の日本人旅行者にかなりアピールする都市であったようで、成島柳北の『航西日乗』にあるようにパリの雰囲気が漂う町に見えた。ミラノで黙雷は名所だけでなく、現地の社会とその風習にも気づき始める。ちょうどカーニバルの時期で、「兩三日大祭なり。万灯もて夜輝き、市街繁昌して極まる」という華やかな雰囲気であった。黙雷は2月28日にミラノに着き、次の日の3月1日にミラノのカーニバルの熱狂的な風景を次のように

伝えている：

大祭にて市街車馬上にて異様の体を為し、男女観を求む。雲客楼上より望み、又街頭を車馬にて巡観す。而して自ら衆観者の列に入る。祭式の訓として粉土の一粒なる、当たれば必ず自ら印する土を以て往来の人に打つ。車上より打つあり、楼上より打つあり。満街の行人、満身白粉に埋めらる。猶撃して之を投ずるに、当れば皆絶倒す。而して人又之を咎むることを得ず。

正しい社会秩序を覆すような街全体の祭り気分を、彼にしては珍しく、その習慣までよく表現している。1873年は有名なヴィアレージョのカーニバル発祥の年に当たる。2月25日の火曜日はカーニバル最終日であった。いわゆる「マルテディー・グラツ」である。記録では黙雷がミラノの入った日は28日であって、この描写は別物ではないかと戸惑うかもしれないが、ミラノ教会区の祭事歴はほかのところとは違い、いわゆる「カルネヴァレ・アムプロスィアノ」は土曜日まで続き、それがちょうど3月1日までなので黙雷の記述と一致する。

もうひとつ、黙雷が特に注目した点がピサを訪れた際の部分に含まれる。ピサまではわざわざフィレンツェから足をのぼしている。「リーニン・トウウル」があるというだけでどんなものかとの説明は一切していないが、彼は記念墓地の壁画の世界に引き込まれた。大聖堂と斜塔の横に位置する「カンボサント」のことである。これも19世紀に大掛かりな整理事業が施され、その当時、おそらく観光物として目新しかったかもしれない。

後にガラリー（市長）の古葬所あり、壁画最も古し。経分・歴史の画、及び地獄・天道等の画あり。地獄の画は人と蛇と魔鬼との争を画く。悪魔は鬼面にして蝙蝠羽を生じ、尾を備ふ。人をして引き下すなり。天使と人と争ひ引くの画なり。

とあり、生々しい場面は黙雷の目には地獄絵のヨーロッパ版に映ったに違いない。

イタリアの中で、もっともゆとりのある気分で観光した所はナポリであった。ギリシャ行きの船を待つこともあり、黙雷と福地桜痴はここに6日間も滞在する。ナポリの街だけではなく近辺のポンペイやポッツオリを含めたカンピ・フレグレイの地まで足を運んだ。本稿ではすべてに触れる余裕がないが、黙雷の記述はナポリ観の資料として貴重なものだと思う。この部分も注意しながら『欧米回覧実記』と成島柳北の『航西日乗』とを読み合わせる必要があるだろう。そして、黙雷の古物巡りの意欲はこの時点で飽和状態になったかのように、周りの社会に目を向けるようになった。当然、見るべきものはすべて見る。ここでは珍しいことに18世紀の有名な錬金術士ゆかりの「カッペッラ・サン・セヴェーロ」を詳しく取り扱っており、明治時代の日本人の旅行記中にはおそらく見られない箇所である。これは「サペロー公の菩提寺なり」と説明した上で、「石像数多、花柱精巧」と感動の表現を交えながら、綿密に彫刻のきめ細かい作りについての描写が数行続く。博物館に行った時も同じで、ギリシャ・ローマ神話を画題としたシーンを驚きをもって記録している。ポンペイのことなどはいうまでもなく、同じ調子で書き続ける。また、火山地帯のカンピ・フレグレイは日本の富士山を思い起こすのだが、他の意味でもナポリは特別な土地であった。黙雷はしばらくしてその事実気がつく。成島柳

北のことばを借りれば、「以太利國中第一の都府と稱して不可なる無し」という見方もあり、ボンペイへ行った時の黙雷は

「途中皆市街通接す。而して貧人満街、皆馬車を逐って錢を乞ふ。処々醜香鼻をつく者あり。王宮所々に在りて皆壮大を極む。嗚呼民者をして淋らしめて独り飽満せる者か。」

と感想を書いている。総じていえば、ナポリ観光の総決算としては名所巡りから得た歴史的な知識よりも、次のような社会問題の響きが聞こえる。ナポリを離れる前の黙雷の最後のことばは、「この辺教育は地に陥ち、人民モラルを知らず」と締めくくっている。伝統文化の重みや、異なった長い歴史を持つイタリアではあるが、日本と同じく輝かしい近代社会の裏には、まだまだいろいろな課題が残っている、とでも聞こえるのではないだろうか。